



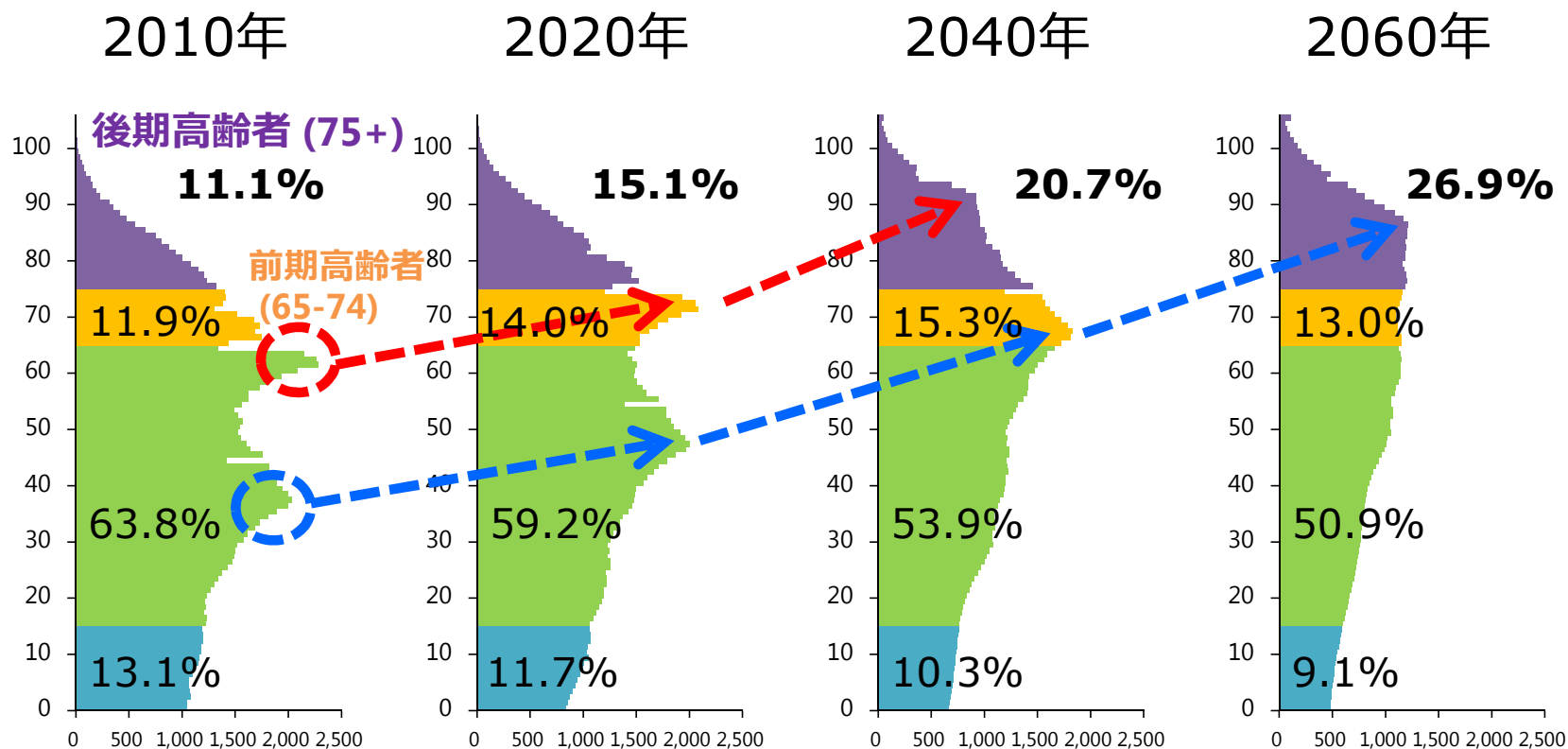
高齢者が高齢者を、 そして多世代を支える社会に向けて

文学部現代社会学科
渡邊大輔

自己紹介

- ▶ 高齢者の社会参加や健康，生活に関する調査研究
 - ▶ 手法は計量社会学，インタビューによる質的分析，混合研究法など
- ▶ 最近のおもなトピック
 - ▶ 横浜市での調査（とくに，ボランティアポイント事業（ボラP），元気づくりステーション事業（元気S）にフォーカス）
 - ▶ 高齢者の生活時間の調査，分析
 - ▶ ヨーロッパ諸国の事例の調査（老健事業）

日本の人口構造の変化



平均余命

男性: 79.6
女性: 86.3

男性: 80.9
女性: 87.7

男性: 82.8
女性: 88.7

男性: 84.1
女性: 90.9

地域包括ケアの時代

目標 = QOL

目標 = 治療

急性期
病院

在宅／地域

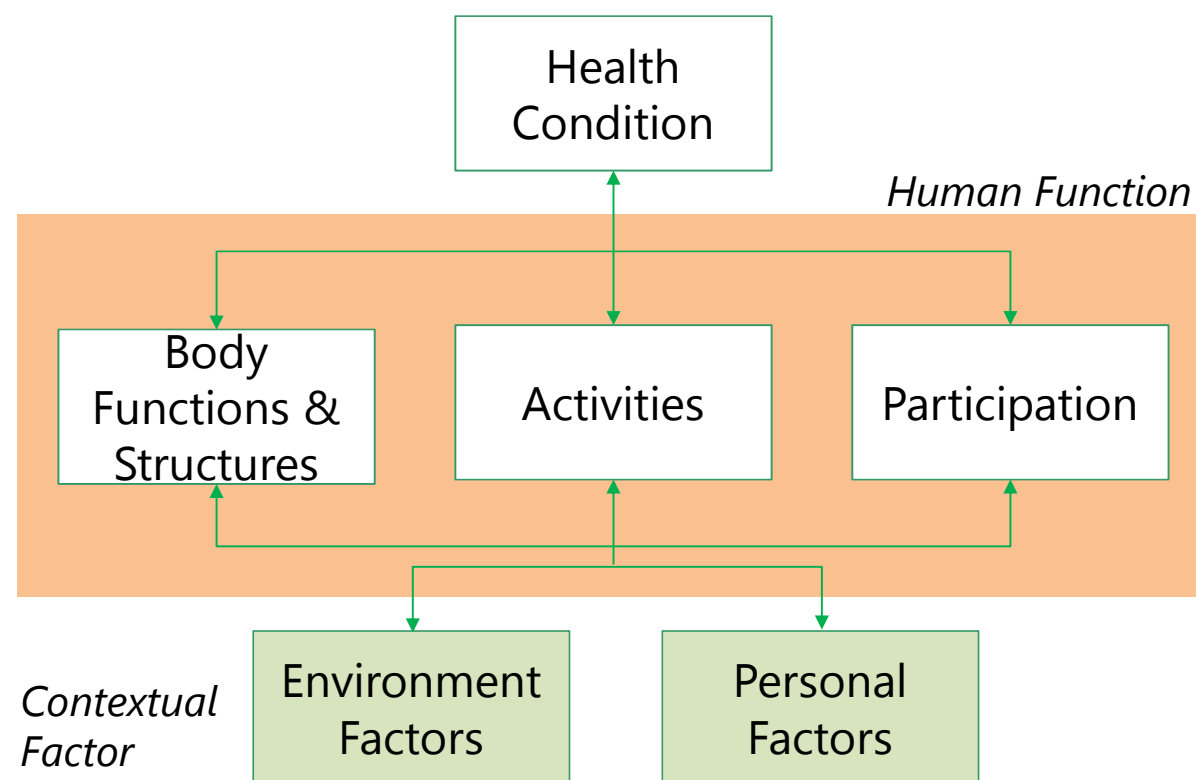
急性期

猪飼周平, 2010, 『病院の世紀』 有斐閣, p.224

新しい健康観の必要性

- ▶ 病気の有無ではなく、病気や障害とともに社会生活を継続し、ウェルビーイングを維持、向上させる能力をもつことが健康
- ▶ 社会参加や社会環境を含めた取り組みは地域が舞台
 - ▶ 地域での支え合いを志向する、地域包括ケアや地域共生社会

ICF Model (WHO, 2001)



住民レベルを考える際の3つのキーワード

▶ 住民レベルで地域包括ケア時代をよりよく生きる

1. 近所，徒歩圏
2. ゆるやかなつながり
3. プロダクティブ

「できること」を長く楽しく続ける

- ▶ 「**サービスを受ける側と与える側の境界線は曖昧がいい**。ボランティアとして活動する，活動する為に色々とやることがリハビリ」
 - ▶ 介護サービスを受けるBさん（女性・80代）
- ▶ 「かつては外出支援をしていたが，寝たきりになった**今は季節の手紙を書くのを手伝っている**。人は最後までできることがある」
 - ▶ 在宅でサービスを受けるCさん（女性・80代）

→ 支えられつつ支える実践

「迷惑をかけたくないという本人の遠慮」と「あの人はもうなにもできないという周囲の偏見」，「年なんだからやらせるなんてかわいそう」 → 価値観の変換が必要

高齢者が高齢者を，そして多世代を支える

- ▶ 都市的空間において近隣と緩やかにつながりながら，多様なプロダクティブな活動にかかわり続ける意義
- ▶ 超高齢社会を迎えるなかで生活において支援が必要な人が急増するが，この人々は同時に支え側に回る可能性を持つ人々でもある
- ▶ 高齢者が高齢者を支え，さらに多世代を支える実践を，行政や地域の団体，大学等が支援していく仕組みづくりが重要

支えられつつ支える仕組み

すべての世代にあてはまるが，超高齢社会という文脈を踏まえ，戦略的に高齢者（前期も後期も）にフォーカスをおいて検証。
ただし，この仕組みは全世代にも有効

なぜ武蔵野市なのか？

- ▶ 近所で、ゆるやかなつながりをベースにした、プロダクティブな実践が多様におこなわれている
- ▶ 2000年「テンミリオンハウス」、武蔵野市高齢者福祉総合条例
 - ▶ 介護保険だけでなく、「高齢者の生活を支える総合的な“まちづくり”の目標が必要」との認識
- ▶ 2009年健康福祉総合計画
- ▶ 2012年「地域リハビリテーション」概念（第5期長期計画）
- ▶ 2016年「いきいきサロン事業」
 - ▶ 2017年より共生社会推進プログラム、多世代交流プログラムでの加算
- ▶ 2016年「武蔵野市シニア支え合いポイント事業」
 - ▶ 2018年度より拡大実施、2020年の本格実施を見据える

地域共生社会を
先どりした政策も

本事業での研究計画と新しい展開

- ▶ 共生社会の構築に向けた、武蔵野市における「いきいきサロン事業」「シニア支え合いポイント事業」の効果検証のための提案
 - ▶ 効果のエビデンス構築のための方法論の提案 ～健康はもとより、社会生活や地域全体への効果も含めて考える
 - ▶ 持続的な運営への提言 ～活動団体のライフコースアプローチ
 - ▶ 新しい福祉人材の掘り起こしの可能性
 - ▶ 世代を超えた展開可能性の模索
- ▶ 海外事例の検証と展開可能性の構想
 - ▶ 多職種共同によって、地域資源を活用した問題解決をはかる実践例の紹介
 - ▶ オランダのソーシャル・バイク・チーム など

ご清聴
ありがとうございました

